# 第 17 回世界ジュニアペタンク選手権大会　報告書

公益社団法人　日本ペタンク・ブール連盟
第 17 回世界ジュニアペタンク選手権大会
日本代表監督　佐　野　裕　二
作成：２０２０年１月１５日

## １．大会概要

第 17 回世界ジュニアペタンク選手権大会（以下「世界大会」）は、2019 年 11 月 19 日～11 月 23 日までカンボジア王国の首都プノンペンで開催された。世界大会は、世界女子ペタンク選手権大会と同時開催となり長期間にわたる大会となった。また、カンボジアにおいてペタンクのレベルは世界的に高いものがあるで、国を挙げて大会を盛り上げていることが良く理解できた。大会会場の整備、選手への接待、大会運営・スタッフ、表彰式、ガラディナーなどかなりの予算をかけて準備されたものだった。

世界大会には、アルジェリア、ベルギー、カンボジア（開催国２チーム）、台湾、チェコ、デンマーク、フランス、ドイツ、ハンガリー、イタリア、日本、ラオス、ラトビア、マダガスカル、マレーシア、モーリシャス、モロッコ、ポーランド、シンガポール、スペイン、スウェーデン、スイス、タイ、トルコ、アメリカ、ベトナムの 26 か国 27 チームが出場していた。

世界大会会場は、プノンペンにあるオリンピックスタジアムに隣接して以前からあるペタンク専用場を改装し、コートはアスファルトを敷き直した上に砂と砂利を撒いた難易度のかなり高いテランを新設していた。また、決勝戦用のメインコートを新設していた。いずれも、屋根と照明のある素晴らしいペタンク会場だった。

## ２．日本代表選手

2019 年８月に長野県諏訪市で開催された代表選手選考会で選ばれた４人の選手と監督で日本選手団を結成し世界大会に出場した。４人の選手は、全て岡山県総社市で活動しているソレイユジュニアペタンククラブのメンバーなので、日頃の練習や強化練習会などを行い、世界に通用する技術を高めチームの団結力も高めて世界

大会に臨んだ。世界大会の目標は、今まで世界大会でジュニア日本代表が成しえなかった「**予選突破！**」。この目標を掲げ、選手・監督が一丸になって大会に臨んだ。

【代表監督・選手】

監督

佐野　裕二　（岡山県総社市）日本ペタンク・ブール連盟 上級指導員

キャプテン

唐川　　凜　（岡山県総社市　15 才）

木下　幸喜　（岡山県総社市　14 才）

伊田　陸人　（岡山県総社市　13 才）

木下　瑞穂　（岡山県総社市　11 才）

## ３．試合経過

**◎予選対戦結果**

| 対　戦 | 勝敗　・　出場選手 | | 得点 | 対戦国 |
|---|---|---|---|---|
| | ◎予選スイス方式 役割（Ｐ・Ｍ・Ｔ） | | | |
| 第１試合 | 日本（○）　伊田・唐川・木下幸 | | １３－３ | シンガポール |
| 第２試合 | 日本（✕）　伊田・唐川・木下幸 | | ９－１３ | チェコ |
| 第３試合 | 日本（✕）　木下瑞・唐川・木下幸 | | ４－１３ | ポーランド |
| 第４試合 | 日本（✕）　伊田・唐川・木下幸 | | ０－１３ | モーリシャス |
| 第５試合 | 日本（○）　伊田・唐川・木下幸 | | ８－１１ | ドイツ |
| | ◎ネイションズ | | | |
| 第１回戦 | 日本（✕）<br>木下瑞→伊田・唐川・木下幸 | | ９－１３ | モナコ |
| | ◎シューティング | | | |
| 第１次予選 | 唐川　凜選手 | １５点 | 第 22 位　第１次予選敗退 | |

**◎予選第１回戦～第５回戦、ネイションズカップ**

第１回戦は、シンガポールと対戦。立ち上がりからポワントゥールが流れを作り、ティルールが状況を変え、ミリューが追加点を挙げる理想的な展開で大事な初戦を勝利した。特に第８メーヌでは、ティルールの見事なカローで決勝点を上げ劇的な勝利の瞬間だっ

た。緊張感の漂う初戦で勝利したことは、次戦以降に良い流れをもたらすと思われた。

第 2 回戦は、チェコと対戦。第 4 メーヌまでに 10 点を取られ厳しい展開であった。第 5 メーヌからは持ち前の粘りを発揮して、9 対 10 まで追い上げた。しかし、大量点のチャンスの場面で、大量点を逃したことが尾を引いて、9 対 13 で振り切られてしまった。この試合の勝敗が、後に影響することになった。

第 3 回戦は、ポーランドと対戦。この試合のテランは特に難しく、ポワンテに苦心した。最後まで、テランをつかむことができず敗戦した。

第 4 回戦は、モーリシャスと対戦。この試合も、ポーランド戦の流れを断ち切れることなく、0 対 13 で敗戦。第 3 試合と第 4 試合の結果から、今回の代表チームは、流れが悪い時にチームの雰囲気を変えたり、モチベーションを高める手立てが不足していることが明確になった。予選最終戦では、そのことを自覚するとともにもう一度最後まであきらめない気持ちを引き出し臨むことにした。

第 5 回戦は、ドイツと対戦。予選最終戦となった。2 勝でも予選突破の可能性があることを信じて、全力で挑戦することを確認して試合に臨んだ。序盤からシーソーゲームの展開。1 球の失投もできない厳しい展開だった。しかし、厳しい場面でティルールがティールを成功させて、チームに勇気を与えた。そして、11 対 8 でドイツを振り切り勝利した。

スイス方式で 5 試合を終了し、総合結果により 18 位となった。予選通過は、16 位までである。残念ながら僅差で目標である予選通過をすることができなかった。

本当に悔しい結果となった。しかし、選手は今まで培ってきた力をすべて出し切り、チーム一丸となって全力で戦った。世界大会で 1 勝を挙げることが、どんなに厳しいことであるかも理解することができた。

予選通過ができなかったので、ネイションズカップに参加した。1 回戦は、カトラージュで敗戦してきたモナコと対戦した。序盤は大量点を取ってリードしたが、

逆に大量点を取られて追いつかれた。その後、相手チームは役割を変えて一気にリードされ、9 対 13 で惜戦した。ここで、今回の世界大会での挑戦は終了した。せめてカトラージュで上位に入りたいところであったが、どこの国と対戦しても 1 勝することの大変さ困難さを感じる結果となった。

今回の日本代表チームは、最高年齢が 15 歳と若いチームで構成された。しかし、他国の選手は殆ど 16～17 歳で構成されたチームであり、この 2 歳差というものは非常に大きな差があると感じた。日本代表選手は、これから 2 年間で様々な経験と技術アップを行えば、十分に世界と戦えると思える。これからの彼らの成長に大いに期待したい。

**◎シューティング**

シューティングには、唐川凜選手が出場した。世界大会までに、本番を想定した練習を繰り返し行った。練習では 40 点代も出すことがあり、自信をもって本番に臨んだ。第 1 投目で 3 点を挙げ順調な入り方ができたかに思えたが、その後得点が伸びず 15 点に終わった。残念ながら、第 2 次ラウンドには進めなかった。シューティングは、初めての出場だったので、緊張で体が思うように動かなかった。やはり、何度かの経験を繰り返さなければ、高得点は望めない。この経験を活かして、更なる挑戦を期するものとなった。今後の成長を期待したい。

## ４．世界チャンピオンは、フランス

　決勝戦は、フランス対ラオスとなった。終始、フランスが先行し圧倒的な強さでフランスが勝利を収め優勝した。なんといってもポワントゥールのポワンテが素晴らしいものだった。座位からのポルテで高速スピンがかかり、どんなに難しいテランでも地面を掴み安定したポワンテで試合をリードしていた。伝統国フランスの優勝は、組織的な強さを示していることが理解できる。フランス国内には、多くのジュニア選手がいる。その中を勝ち抜き、フランス代表選手の座を掴むことは至難の業であろう。しかも、年齢的には 16 才から 17 才の選手と思われる。日本代表選手は、15 才が最高年齢である。選手層の厚さに大きな差があることも理解できる。このことは、日本のペタンク界の大きな課題と言えよう。

## ５．代表選手の反省と今後の取り組み

**◎世界大会でできたこと**

・試合を行いながら、ポルテがうまくなった
・テランに応じて、ボールの高さを変えながらポワンテができた
・大事な場面でティールを成功させることができた
・大会を楽しむことができた
・世界の選手と仲良くすることができた

**◎これからの課題**

・第 1 球目を大切に、成功させることの大事さが分かった
・ビュットの手前にポワンテを成功させる
・テランに応じた様々なポワンテができるようにする
・自分の狙った着地点に正確に落とせるようにする

**外国選手の素晴らしい所**

・ポワンテやティールのボールにすごく回転がかかっている
・重要な場面でカローを決める
・チームの一体感がすごい
・チームにムードメーカーがいて、仲間を勇気づけている

**◎これから取り組むこと**

・誰とでも一体感が持てるとよう力をつける
・回転の多いボールを投げられるようにする
・コースをずらさない、きちっと合わせる（中抜きのティール）
・落とす位置に正確に投げられる練習をする
・コミュニケーションが取れるようにいろいろな大人の選手と試合に出る
・試合のいろいろな場面を想定してアトリエを作って成功させる

## ６．今後の課題

最後に、世界大会を振り返って、今後の日本のペタンクの発展のための課題を挙げる。これらの課題を全国で取り組むことにより、世界と戦える選手の育成ができると考える。全国のペタンクを愛する仲間に、未来の日本のペタンクのために、共に取り組みを進めることを呼びかけたい。

### ① どんなテランでも対応できる技術の習得

世界大会のテランは、難度の高いテランで行われる。難度の高いテランでは、①砂利でも安定した着地ができる高速回転のボールが投げられること、②砂利の少ない着地点を見つけ、その位置に正確に落とせる制度の高いコントロールが必要である。

今回出場した選手は、小学校低学年からペタンクをはじめ、しかも、世界大会をめざして砂利のテランで日々練習を積んできた。しかし、①高速回転、②精度の高いコントロールは十分習得できていたとは言えず、安定したポワンテができなかった。

今後は、ボールをしっかり巻き込み手から離す瞬間に手首を返して高速スピンをかけるスナップ投法をさらに習得すること。自分の決めた着地点に正確に落とせるコントロールを身に付ける練習を繰り返すことが重要である。

### ② 難易度の高いテランのペタンク練習場の整備

上記の質の高いボールを習得するには、難易度の高いテランで練習することが必須である。いくら質の高いボールの習得をめざしていても、実際に難易度

の高いテランで実践しなければ習得できない。世界大会の上位の国の選手は、質の高いボールを投げていた。普段から難易度の高いテランで練習してきた証である。

日本においても、難易度の高いテランという環境づくりが急務と考える。そのためには、個人の取り組みでできることではない。各県、各地域連盟での環境づくりの取り組みが必要と言える。

③ **一体感のあるチーム作り**

上位国のチームは、選手・コーチとの一体感・強い絆を感じた。特に、ピンチの場面では、選手やコーチとしっかり話し合い結論を出し、決めた作戦は全力で挑戦するチームワークがあった。また、各チームには仲間を励まし、鼓舞するリーダーが存在した。この一体感は、簡単にできるものではない。日頃の練習でも、しっかり話し合うこと、様々な意見を出し合うこと、リーダーシップを取る能力を高める努力をすることを意識的に行わなければならない。

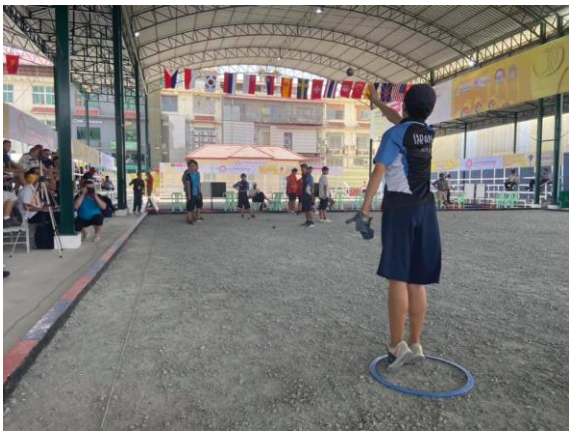
日頃の練習の中から、どんな選手ともコミュニケーションが取れ、一体感の持てる意識的な取り組みが必要である。ぜひ、今後の練習や強化合宿でも取り組みたい。

以上、３点の課題を提起する。私自身も、日本ペタンク・ブール連盟の上級指導員として、この課題の解決のために、日本連盟の組織的な支援と全国の志ある仲間と力を合わせ、微力だが尽力したと考える。

最後に、世界ジュニア選手権大会の出場に際して、様々なサポートをしてくださった方々や全国各地から応援してくださった方々に、心からお礼申し上げます。そして、この報告書をもって、そのお礼に代えさせていただきます。本当に、ありがとうございました。

## 世界ジュニアペタンク選手権大会の様子

開会式を待つ各国選手団



素晴らしい大会会場

カローを決める木下幸喜選手

チェコ代表選手と記念写真

初戦の台湾戦に勝利

優勝したフランス代表チーム

## 世界に羽ばたくために

唐川　凜（中学３年生）

今回の世界大会で、今まで感じることができなかったものを肌で感じることができました。今まではチームのほとんどが私より年上だったので支えられ、安心した中でプレーしていましたが、今回はキャプテンとしてチームを支えていく立場だったので本当にキャプテンとして引っ張っていけるのかとても不安でした。2 年前の世界大会のときキャプテンだった加藤君の姿を見てキャプテンは精神的にも身体的にも大変な役割だということを感じていましたが、実際、世界大会という場で、キャプテンの役割を果たすことは自分が思っているよりも本当にしんどかったです。

コンクリートの上に薄い砂利を敷いたようなテランで跳ねやすく、ポワンテに苦労しました。高レベルの選手は、ただ回転を多くかけるだけではなく、柔らかいボールで的確に狙ったところに落としていました。ポワンテの技術向上のために練習方法を見直し、もっと投げ込み体に覚えさせなければ、世界には通用しないと実感させられました。自分のプレーで精一杯になり、キャプテンとしての心にゆとりがなく、しっかりとサポートできなかった部分があり、チームには本当に申し訳なかったと思います。

また、シューティングに初めて出場しました。あの場面は今まで感じたことのない不思議な空気でした。緊張のあまり思い通りのプレー、のびのびとしたプレーができず、自分のメンタルの弱さを痛感しました。

今回の世界大会の内容ははっきり言って良いものではありませんでしたが、私は多くの事を学び吸収することができました。私が一番感じたことは、キャプテンはチームの中でとても大切な存在であるとともに多くのおもりと責任が伴うということです。それに打ち勝たなければキャプテンとして素晴らしいプレー、チームを勝ちに導くことはできないと思いました。これはペタンク以外の事でも言えることだと思います。これからの人生１人の人間として精神力、先頭に立って引っ張っていける力を技術向上と共に身に付け、成長したいと思います。

今回の世界大会にあたり、最後まで私たちを支え応援してくださったたくさんの方々、監督、仲間、本当にありがとうございました。心から感謝しています。

## 5 度目の国際大会を終えての課題

岡山県総社市　木下　幸喜（中学３年生）

世界ジュニア選手権大会出場へのご支援下さった方々に感謝申し上げます。

今回のチームは普段から一緒に練習をしている仲間でしたが、さらにチームワークを良くすることを意識して練習をしました。大会での目標は、予選突破し上位に入賞することでした。国際大会ではティールが成功しないと主導権が相手へと流れてしまうため、個人的には特にティールの練習に力を入れました。

大会では心に残った試合が二つあります。一つはシンガポール戦です。
その試合は初戦ということもあって、チームの息が合うのが遅れましたが、大切な場面での成功の投球が多く、私のティールが外れてもチームのメンバーがカバーしてくれました。それによって私もティールの調子が良くなり、最後のメーヌでは二球ともカローになり勝利しました。もう一つは、ドイツ戦です。この試合では普段日本ではできないようなことを体験できました。それはティールの積極性です。ドイツのポワンテはビュットから 60ｃｍほどの位置に置くようなものでした。ビュットから 60ｃｍの位置はポワンテとティールの選択に迷いやすい距離なのです。しかしポワンテが非常に難しい地面だったので、ティールを選択し積極的に攻めました。また、ポワンテの正確性を高めること、回転の大切さも学びました。この２試合を経験し、ドイツ戦のような難しい位置へのポワンテや積極的にティールすることが必要だと思いました。

今回の大会では予選突破はできませんでしたが、今後に生かせるような素晴らしい発見もありました。これらの経験を今後につなげていきたいと思います。

## 世界ジュニアペタンク大会に参加して

伊田 陸人（中学３年生）

今回、初めて世界ジュニアペタンク選手権に参加しました。試合を終えて一番感じたことは「世界のジュニア選手の実力はすごい」ということです。ただ、試合では世界の実力に圧倒された試合だけではなく、自分の中で、とても印象に残った試合が２試合ありました。まず、その一つがチェコ戦です。日本が０点でチェコが９点、このままでは試合が終わってしまう展開でした。その後、チーム全員で１点ま

た１点と積み重ね、９対 13 で負けてはしまいましたが、最後まで「あきらめない」粘り強い試合を行うことができました。また、もう一つはドイツ戦です。チェコ戦とは逆に日本が点を着実に積み重ねリードしていましたが、ドイツの粘りに同点まで追い込まれました。追いかけているチームには勢いがあり、その雰囲気に飲み込まれそうになりましたが、チーム全員が冷静になり、自分たちがやるべきプレーを行い、勝利することができました。今大会の目標である予選突破は叶うことができませんでしたが、印象に残った２試合を通じて、「あきらめない精神力」と「チームワークの大切さ」を学ぶことができました。今後も、技術面、精神力、チームワーク力を向上させるために日々がんばっていきたいと思います。最後になりましたが、日本ペタンク・プール連盟、佐野監督をはじめ全国から応援ご支援してくださった皆様、代表チームメイトの皆様、本当にありがとうございました。

## 世界大会で感じたこと

岡山県総社市　木下　瑞穂（小学６年生）

今回はたくさんの応援をありがとうございました。

国際大会に初めて参加して、いつもの日本の大会とは雰囲気が違って少し緊張したけれど、楽しかったです。

開催国カンボジアの気候は日本とは違ってとても暑く、慣れるのに時間がかかりました。大会会場の地面は砂利の大きさの差が激しかったけれど、私にとってはやりやすく、ポルテを中心にして投げていました。他の国の選手はドゥミポルテを使っている人がとても多く、上手く寄せていました。私のこれからの課題は、投げた時に手が左へ行ってしまうのでそこを気を付けて、どんな地面でも上手く寄せられるようになりたいです。

特に印象に残ったことは、チェコとの試合です。私は試合には出ずに見ていました。最初、日本は大きくリードされていたけれど、どんどん追いついて行きました。でもチェコの一人の選手が気合いでチームを引っ張っていて、接戦になり、とても粘り強くてすごいと思いました。

今回の日本のチームは、盛り上げが少なかったので、チェコの選手を見習ってチームワークを良くしていきたいです。　私は今回の世界選手権で、色々な国の人と仲良くなれました。次に国際大会に行く機会があれば、英語を勉強してもっとたくさんの人達と話し合えたら良いと思いました。